



# 行く水

美知代女

二

「それでは幾日にあがればよろしいのでせう？ はつきりした事を仰有つて頂きたい」

女關先きで男の怒鳴る聲が致します。清子は、ハツとして躊躇ひましたが、袖垣の小蔭にそつと身を寄せて、轟く胸を押え、家内の様子を伺ひました。

「……まことにどうも……まことに申譯も御座いません」

「いや、そんな事は兎に角、私も忙しい體です、酒

落や冗談で毎日斯うして出掛けて来るんちやありません、何時の何日なら拂へると云ふ、はつきりした日を定めて約束なすつて頂きたいと云つてゐるので、全く忙しい中から巢鳴くんだりまで、電車賃をすりに来るんちや引合ひませんや」

「御道理で御座います、ですけれども……」

「ですけれども、御主人が御不在だからと仰有るのかね」

「……ハイ、あの、其後引續いて宅へ歸つて参りませんのですから」

「ハハハハハ、いけませんよ奥さん」

客はマツチを摺つて、敷島を吹かし初めました。午後六時を過ぎた冬の日の、四周はもう薄暗くなつて居りますのに、電燈一つない場末の裏屋住居の佗しき、滅入つたやうな二分心の小洋燈が、僅かにしよんばりと物淋しい母様のお姿を見せました。

「主人の不在云々はもう聞きあきました。そんな事で逃げるお積りか知らないが、此方はもうそんな手

には乗りません、御主人はあなた、今朝裁判所へ引かれてるぢやありませんか、ハハ當分歸りつこはありますまいよ」

「まあ！」思はず聲を立てやうとして、清子はなほも立ち聞きませんでした。

「あの、それは全くの事なので御座いませうか、あの、何處でお聞きになりましたか、一體どうした譯なので御座いませう？」

寢耳に水の母様が、おどろく震えるやうなお聲でお聞きになりました。



家へはお歸りなしで？」

「え、さうなので御座います、ですけれども、何の罪状なので御座いますか？」

「何でも詐欺罪のやうに聞きましたよ」

「まあ！そんな！」崩折れるやうな吐息と共に、「いゝえ、そんな譯は御座いません、それは何かの、何かの間違ひに違ひない、そんな不徳義な事をするやうな人間ちや御座いません！」

「いや、御災難でせう」

「ホウ、御存じなかつたのか、ではあれから全く此

思つたので御座いませう、今の今まで手厳しい催促

をしてゐた借金取りの男までが、何だか慰さめるやうな調子で云ひました。

『まそんなに御心配なすつた處で仕方がない、全く身に暗いおぼえさへおありなさらなきや、ナーニ今に晴天白日の體になつてお歸りですよ、ね奥さん、あんまり御心配なすつちやいけません』

『有り難う御座います』  
『では私は歸りませう』

『ですけれどもあの、まことに申譯も御座いせんが、先刻からいろ／＼申上げましたやうな譯合で御座いました』

『いや、其内に又あがりますから』

『と申した處で、今の處、ハッキリした日を定めてお約束する事も出来兼ねますので…』

『いや、ちよい／＼出て見る事にしますから、御都合のつくだけづ、お入れ下さつてもよろしいです』

『有難う御座います』  
母様は呻に頭をおさげになりました。

『とんだお邪魔をしました』  
ガラリと格子戸を開けて出て行く人の後姿を見送つた清子は、今の今まで母様をいぢめる憎い男とばかり思つてゐたその人の、意外な情が嬉しくて、心から感謝しないでは居られませんでした。

『母様！』  
悲しい聲に呼びかけながら家の中へ入つて、其儘其處に考へ込んだ母様のお傍へ寄つて行きました。

『母様、本當でせうか、本當に父様は…』

『お前如何して知つてゐるの？もう世間ではそんな噂がありますの？』  
母様のお顔は心配に堪へぬものゝやうに、いよいよ蒼白めて見えました。

『私、今戸外に立つて聞いてましたの』  
『今の方のお話を？』

『え、ですけれども、父様はそんな詐欺なんかなさりはしませんね、母様！』  
『さうですとも清子さん！』

て居りました。

『父様はお寒いでせうね』  
ふと寒さに襲はれて

清子が云ひました。

『夜のものも御不自由だらうしねえ』母様は俯向いたまゝ、今にもこぼれさうな涙のお目を擧げも得ず、『と云つて何も彼も差押えの時なくしてしまつて、毛布一枚お差入れる事

も出来ないんだもの…清子さん、父様は今頃如何なすつてるだらうねえ』  
『…』清子はどう母様を慰さめてよいものか、云ふべき言葉を存じません、そして唯、不自由勝な父様のために、何とかする事は出来ないものか—

『でも災難なら、災難なら…』  
『だから心配してゐんです、會社の事からね、ついそんな風になつて、詐欺の嫌疑で拘引されなすつたかも知れないと思つてね…』

『全くね…』  
泣くにも泣かれない悲しい心は、

掻きむしつても足りない、母△



△子は只途方に暮れて何時までも黙つたまゝ坐つ

と云つた風な事ばかり考へ込みました。

ですけれ共家の中の貧しさは、茶の間に臥つた稚い弟妹の寢床さへ、ともすれば此頃の夜寒を凌ぎ兼る程でして、つい半月前、中野の邸に居た頃の家財一つ、手許に残つてはゐませんでした。

「今晚は」

臺所の水口の方で人の氣配が致します。

「誰？」

口に出しては申しませんが、母子は殆ど同時に、さうした意味の眼と眼を見合はせました。

「また誰か借金取ではないかしら？」

差押えから以來、一寸とした來客にも胸を冷す淺間し。

「何屋さんですか」

清子が立つて聞きました。

「いゝえお嬢様、私で御座いますよ」

「あら、婆やなの」

まあよかつたと胸撫で下しながら、清子は極り惡

げに顔を赤らめました。

「オヤオヤ坊ちやまも、小嬢ちやまも皆様おとなにおねんねで御座いますね」

「婆や、此方へどうぞ、清子さん、お火鉢を持つてらつしやいな」

母様が斯う聲をお掛けになりました。

「どうぞもう、お嬢様、お火なら婆やがとりませうです」

「いゝのよ、はやく母様の方へいらつしやい！」  
律義者の婆やは、以前息子が會社の集金人が何かに使はれてゐたと云ふ、たいそれだけの恩義を忘れずに、落ぶれて斯うなつた今も矢張り、ちよいと顔を出しては臺所の洗ひ物を手傳つたり何か、細めに働らいて行くのです。

「まあ左様、それでは矢張り本當だつたのかねえ、

火鉢を持つて行きますと、婆やと二人頭を突き合

せて被入つた母様が、力のない聲で仰有いました。

「宅の悴があなた、暫らくお姿をお隠し遊ばすやうに、度々御注意申上げましたのださうですけれど、旦那様はあつたお立派な御氣象で被在るものですから、どうしてもお聞入れになりませんで、とうとうヒヨんな事になつてしまいました」

「まあね……」

何と云ふ事もなく母様は只斯う云つて、相變らず考へ込んでおしまひなされる。

「ねえ婆や、何時かの話の御奉公の口ね、あの口はもうなくつて？」

ふと思ひ出したやうに清子が訊きますと、婆やは不思議さうに、

「何で御座いますか、あの私共の娘を手傳つて貰ひたいと云ふあの口で御座いますか」

「え、さうなの」

「あれはあなた、生憎娘が他様へ出ました後でしてまだ好いのがないらしい様子で御座いますよ、お給

金なんかも、半期分位まゝとめて下さるさうですし、

ちつと大家内でお子様が多いので何ですけれど、今時堅氣の御奉公ではねあなた、まとまつて半期分のお給金なんぞ下さるお家は御座いませんよ」

「さうともね」

母様が合鍵をお打ちになりました。

「婆やさん、其處のお家、誰でも使つて下さるでせうか」

「え、え、是非一人雇ひたいと仰有やるんださうですが、生憎なものでして、探す時にはねあなた、無いもので御座いますね、あるにはあつても、何しろ家内が多いものですから、行くものも一寸と考へますですよ」

「私を世話して呉れないこと？」

「何で御座いますつて？」

「え？」

婆やと母様とが一時に驚きの顔を擧げました。

——つゞく——